

蓬
左
HÔSA



曳き屋作業準備中の旧書庫(現蓬左文庫エントランスホール 平成14年夏)

名古屋市蓬左文庫
HÔSA LIBRARY, CITY OF NAGOYA

徳川義親と蓬左文庫

桐原千文



「蓬左文庫」開館当時の義親氏

蓬左文庫は、尾張徳川家の蔵書を受け継ぐ文庫である。江戸時代以来の同家の蔵書に、「蓬左文庫」と名付けたのは、尾張徳川家第十九代当主徳川義親である。大正元年ころのことである。「蓬左」と

は、江戸時代に使われた名古屋の別称であり、名古屋城も「蓬左城」とよばれた。蓬左城に伝えられた書物を所蔵する文庫という意味をこめた命名であつた。

徳川義親は、徳川家康の次男結城秀康（五七四～六〇四）を祖とする越前福井松平家第十六代

を継いだ松平慶永（春嶽一八二七～九〇）の第五男として明治十九年（一八八六）に生まれた。明治四十二年、尾張徳川家第十八代義礼（よしあき）の養子となつて長

女米子と婚約し、義礼の死去により同年第十九代当主となつた。

東京帝国大学国史科に進んだ義親は、尾張藩の旧領である木曽の林政史を研究テーマとし、木曽の村々をまわって旧家に残された古文書を調査し、「木曾林政史」をまとめた。しかし、当時の歴史学界は、江戸時代のしかも林政などは歴史学の対象として認めなかつた。

歴史学に失望した義親は、卒業後、こんどは植物学科に学士入学し、大正七年（一九一八）には、徳川生物学研究所を開設したほどであつたが、木曽の林政や歴史資料の調査、研究をやめたわけではなかつた。大正四年に『木曾山』を出版したのをはじめ木曽の林政を生涯の研究テーマとし、同十二年には、東京の邸内に林政史研究室（後に蓬左文庫附属歴史研究室を経て現在徳川林政史研究所）を開設したのである。

植物学科への学士入学を決めた明治四十四年、

義親は尾張徳川家維新資料編纂事業に着手し、これを尾張徳川家維新史編纂所と名付けた。この年、薩長藩閥色の強い明治維新資料編纂会が文部省内に設置され、国レベルでの維新期の資料収集が開始された。義親による尾張徳川家維新史編纂所の設置がこの政府による維新史編纂を意識したものであったことはほぼ間違いない。

幕末期に活躍した旧藩士の記録や聞き書きをもとめて大々的な史料の調査が行われ、資料の収集と丹念な筆写本の作成が行われた。収集した資料から尾張藩の動向に關わる部分を抜き出し、編年に編集する計画であつたようだ。実際には、史料をみなかつたが、以後旧藩士の記録や尾張藩および尾張に関わる資料の収集を積極的に行うこととして認めなかつた。

相前後して義親が「蓬左文庫」と命名した江戸時代以来の尾張徳川家の蔵書調査が行われ、大正二年（一九三三）、蓬左文庫としては最初の印刷目録が刊行された。同じ頃、旧大名家の道具類が書画骨董のせり市に並ぶのを目の当たりにしていた義親は、伝来の調度や蔵書の散逸を防ぐため、財団法人の設立と美術館、文庫の建設を決意する。それから十年余、昭和六年、財団法人徳川黎明会が設立され、尾張徳川家が所蔵してきた大名道具や蔵書の大半が、財団の所有となつた。

美術館、文庫の公開に際して義親は、保存と公開を両立させるための様々な方策を高じている。その代表が『国宝源氏物語絵巻』の切断であり、当時最高の技術を誇った田中親美氏による複製制作であつた。蔵書の大半は、明治維新以来名古屋の大曾根邸に保管されており、公開に先立ち東京に移されて調査が行われた。これによつて現在重要文化財に指定されている『河内本源氏物語』の学術的

価値が明らかとなり、義親は、三百部限定で全冊の写真版の複製を刊行した。

昭和十年（一九三五）、名古屋の旧大曾根邸内に開館して蔵書の公開が始まった。義親が収集した木曽の林政資料や維新資料編纂にはじまる旧尾張藩士の蔵書や尾張藩と尾張にかかる資料も、開館に際して蓬左文庫および、附属の歴史研究室（後の徳川林政史研究所）の所蔵となつた。江戸時代のはじめに尾張藩御文庫を創設したのは初代藩主義直だが、尾張徳川家の蔵書を受け継ぐ蓬左文庫を創設したのは義親である。蓬左文庫にとって、義親は、名付け親であるとともに生みの親であった。

大正から昭和にかけて、財団の設立をはじめ尾張徳川家の江戸時代以来の財産管理に先進的な方策を講じる一方で、義親は文化、芸術のみならず政治経済の多方面にわたって多彩な活動を行つていった。政治の世界では、その右から左まで幅広い交友関係によって、様々な歴史的事件にも関わつた。

昭和二十年の敗戦によって、財団の運営を支えていた基金の半分は価値を失い、資金難に陥つた財団は、美術館、文庫をはじめとする施設の運営に窮することとなつた。解決策として出てきたのが蓬左文庫の売却であつた。売却先としては国会図書館などからの引き合いもあつたが、古巣の名古屋へ帰ることとなつた。

義親は、当時の地元の郷土研究誌によせた一文

で「執着を一度捨て、二度捨て、悟つたつもりでも、その思いが中々消え去つたのではない。凡俗なるが故に、その煩惱から解脱できるものではない。今はただ、蓬左文庫のいよいよ育成されていくのを祈るのみである。」と生みの親の惜別の情を記すとともに、「當時の新聞に掲載された記事では、昭和十年の蓬左文庫創設当時は、名古屋に文庫を開設しても、充分な利用が望めないと判断して東京においていた。戦後復興の今こそ名古屋を文化都市として発展させるためにも郷土の図書館として蓬左文庫を名古屋に移すのだと記した。

義親が名古屋に移る蓬左文庫に期待したのは、尾張徳川家の蔵書を核とした専門図書館構想であつたようだ。昭和四十年、蓬左文庫が使用していく戦前からの建物が取り壊されて東図書館が建設され、郭に蓬左文庫が入つた。義親は図書館と聞いて喜んだが、東図書館が幼児から大人までを対象とした一般の公共図書館であることに、たいへんがっかりしたという。

平成十六年十一月、蓬左文庫は、新たに整備された施設で何度目かの再出発の時を迎えた。徳川美術館とは廊下で繋がり、双方の所蔵品を展示する展示室が整備された。閲覧室も広くなつて、いわゆる現在のIT技術にもそれなりに対応しつつある。これから蓬左文庫がはたして義親の理想に向かって歩むのか否か。蓬左文庫の未来は、蓬左文庫の利用者の手にゆだねられているのである。

（蓬左文庫学芸係長）

春季特別展 徳川義親と文化遺産 平成18年4月12日から5月28日



様々な政治活動や「虎狩りの殿様」として知られる尾張徳川家十九代義親の、徳川美術館と蓬左文庫の設立をはじめとする多彩な文化活動をその遺産とともに紹介します。

義親は、美術品や古典籍の保全を図るために修理や複製の作成を手がけ、数多くの著作も遺しました。国内の郷土玩具や東南アジアの民族資料や木曽山や幕末維新时期の史料収集にも着手し、さらには音楽家の育成にも関心を寄せるなど、義親の業績は多岐にわたります。

本展では、これら義親の残した文化遺産を紹介し、ユニークな人物像や卓越した先見の明にも迫ります。



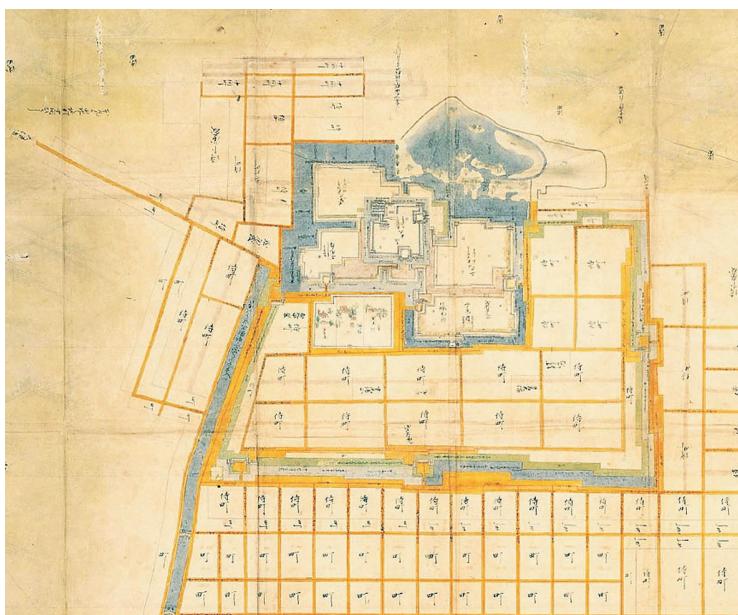
名古屋城下町散歩

江戸時代にタイムトラベルして、名古屋の御城下を散歩してみませんか。

「尾張名古屋は城でもつ「五重の天守閣に燐然と輝く純金貼りの金鯱を仰ぎ見ながら、三の丸の侍屋敷を通り抜け、本町御門を出ると、整然と区画された「碁盤割り」の町並みが、広小路まで続きます。本町御門より熱田神宮まで通じる本町通は、名古屋のメインストリートで、名店が軒を連ねます。呉服反物、書籍、薬をはじめ香木や江戸の流行物を取り次ぐ店までありました。

広小路の南、本町通沿いには、寺院の大伽藍が建ち並びます。ここ大須界隈は寺町であると共に、名古屋随一の盛り場でした。芝居や見せ物の小屋、料理屋は大勢の人で賑わいました。

城下の人々の暮らしぶりを、当時の番付（ランキング）や引札（宣伝ちらし）など初公開の資料をはじめて紹介します。



名古屋城絵図 正保4年(1647)

現存する最古の名古屋城下図。城を扇のかなめとして南東に町が造られた。徳川家康の都市計画になり、近世を代表する都市になった。しかしながら、印刷された地図は江戸時代には作られなかった。全て手書きの筆写である。



名古屋東照宮祭礼図卷 森高雅筆

本町通の末広町辺りを南行する東照宮祭礼の行列と見物する町衆。^{だし}山車は七間町の「橋弁慶車」。左端は大丸屋呉服店、その北は「地黄丸」の看板の上の薬種商。後方には桜天神社の「時鐘」が見える。

なごやのまつり

江戸時代の名古屋城下や熱田などでは四季折々に祭りが行われました。徳川家康を祀る名古屋東照宮の祭礼(名古屋祭り)は、旧暦の四月十六日と十七日(家康の命日)両日に、神輿や、からくり人形をのせた山車、町人たちの仮装行列が城下を練り歩き、この地域では最も規模の大きな祭りでした。

城下の若宮八幡宮の祭りは六月

十六日におこなわれ、神輿が三の

丸に置かれた天王社(現那古野神社)に渡るのにあわせて、7台の華麗な山車が曳かれました。天王社の天王祭りも同日に行われ、夏の疫病(伝染病)を防ぐと考えられて、宵祭りにたくさんのちようちんを飾った車楽という大型の山車と、からくり人形をのせた見舞車という小型の山車が出て、夏の夜をいろいろありました。

また、熱田の天王社(現南新宮社)でも六月五日に天王祭り(熱田大山祭り)が行われました。熱田の町の八地区から出された、二十メート

ルをこえる高さの大山という大型の山車二台と、十二メートル程度の高さの車楽(小山ともいう)という山車六台が祭りの中心でした。

今年も天王祭りの当日に徳川園内で行われる山車揃えにあわせて、蓬左文庫の展示室に、名古屋市域で行われた祭礼に関わる、絵画、記録、古地図などを展示して、祭礼の姿を紹介します。江戸時代の祭りの多くはその姿を変えてしまいましたが、当時の絵画などで祭りの賑わいをうかがうことができます。



あつた さいでんねんちゅうぎょう じ ずえ
熱田祭年中行事図会 10冊のうち

熱田社の年中行事を月日順に解説し、祭りの行事の次第に極彩色の挿絵を付けたもので、第8冊に熱田天王社(南新宮社)の天王祭りの次第が描かれている。



ちょうしゅうざつし
張州雑志 100冊のうち

尾張藩士内藤東甫(1728~88)が編集した、挿絵入り尾張国地誌。卷20から卷23まで「府内東照宮御祭礼」と題して東照宮祭礼の様子が描かれている。社頭の雅楽の場面に始まり、町々の警護(仮装行列)と山車が、城下のお旅所に渡御する神輿に付き従う華麗な祭礼行列が詳細に描写されている。

4月12日～5月28日

春季特別展 徳川義親と文化遺産

5月31日～7月23日

名古屋城下町散歩 なごやのまつり

以上の三つの展覧会については、本紙2～5頁を
参照下さい。

江戸の自然観察 7月26日～9月24日



私たち人間を取り巻く自然界にある、およそ薬となり得るものすべてを探求する学問を本草学といいます。江戸時代中期、十八世紀には、本草学は蘭学の影響を受け、動物・植物・鉱物そのものや自然現象にも関心を向け、研究対象とする博物学へと広がりを見せました。こうした動きに伴い、本草学や博物学に関する書物や美しい図譜が数多く生み出されました。多彩に富んだ書物や図譜などは、自然と真摯に向き合い、対象を正確に観察、把握研究しようとした先人たちの熱意、興味、驚きを今に伝えてくれます。

身近な日本の自然をはじめ、海外の珍奇な動植物に至るまで、江戸時代の人々の旺盛な眼差しによって捉えられた自然のすがたを紹介します。

国絵図と城絵図



江戸幕府は尾張国や美濃国など全国におよぶ国単位の絵図や各藩の居城の絵図を各藩に命じて作成させました。また、日本全国の地理・地勢の把握

は大名家にとって重要な事項でした。日本全国六十余国におよぶ国絵図や各地の城絵図が多くの大名家に伝えています。

尾張徳川家には、幾種類もの全国におよぶ国絵図や城絵図が所蔵されていました。尾張徳川家旧蔵の二千枚をこえる絵図コレクションのなかから、同家が制作または収集した国絵図、城絵図を紹介します。

9月27日～11月5日

秋季特別展 絵で楽しむ日本むかし話 —お伽草子と絵本の世界—

室町時代から江戸時代にかけて流行した物語「お伽草子」は、絵巻や絵本などの形で絵画化されました。動植物が主人公となつて活躍する物語、合戦物、恋愛物など多様な物語内容とともに、素朴でユーモラスな絵もまた、その魅力の一つです。登場人物達の台詞が絵の中に書き込まれた、

マンガを思わせる作品や絵草紙屋によつて量産された「奈良絵本」と呼ばれる冊子、大名家の姫君達の目を楽しませてきた婚礼調度本など、さまざまな作品を通して、お伽草子の世界を紹介する展覧会です。



11月8日～12月10日

異国へのまなざし



日本には、多くの美術工芸品が海外より、古くから輸入されてきました。隣国の朝鮮、中国や東南アジアからのみならず、遠くヨーロッパや中東東イスラムの美術工芸品ももたらされ、大切に利用保存されてきました。日本人の異国へのまなざしは江戸時代から、豊富な眼差しによって捉えられた自然のすがたを紹介します。

江戸の兵学 9月27日～11月5日

戸時代の鎖国制度のもとでも、長崎貿易を通じて開かれました。ことに将軍家に次ぐ尾張徳川家では、珍しい貿易物資も多数所蔵し、利用されてきました。本展では、日本にもたらされた異国の美術工芸品のほか、豊富にもたらされた知識や情報、技術も紹介します。

尾張藩の兵学

江戸時代の武士の本分は軍事にあり、軍事研究（当時は「兵学」といいました）が盛んでした。また、尾張藩は、藩主を指揮官とする軍團という性格を持っています。

藩主以下日々から部隊の編成や指揮について学んでおく必要がありました。尾張藩で盛んに学ばれた長沼流の兵字書をはじめ、布陣図・行軍図、城郭図など尾張藩の兵学について紹介します。

19年1月4日～2月18日

東洋の印刷と版本

人は、伝達手段として文字を生み出し、さらに文書や著述をより多くの人々に伝える手段として、筆写から木版刷りや活字による印刷を生み出しました。ドイツのグーテンベルクが活字印刷術を発明したのは15世紀半ばのことですが、中國では7世紀頃には木版印刷が、11世紀には活字印刷が行われていたといわれています。また朝鮮(高麗)では13世紀には金属活字による印刷がはじめられました。わが国では年代が明らかな印刷物「百万塔陀羅尼」が770年に刷られています。以後経典はじめ、詩文や儒書、辞書、物語文学あるいは版画などさまざまな出版がおこなわれてきました。本展覧会では、このよう



19年2月21日～4月8日

ここるの旅 —名所と詩歌—

日本人の美意識から生まれた「やまと絵」。その始まりは、「國々の名高き所々」を描き和歌を添えた屏風絵であつたと考えられています。以来、名所のイメージは、美しい詩歌のフレーズと結びつき、文学と一緒にした主題として造形化されてきました。また、名所を巡る旅は、単に景勝地を訪れる目的ではなく、むしろ古人が詠んだ名歌名句と出会う営みとして重んじられました。名所を題材とした美術品を、和歌や漢詩、紀行文とともに紹介します。

南蛮・紅毛の学問

戦国時代にポルトガル人、スペイン人(当時両国人は南蛮人と呼ばれた)の来航により、西洋の学問知識が日本国内にもたらされました。後れてオランダ人、イギリス人(彼らは紅毛人と當時呼ばれた)も来航し、交流に加わりました。医学、地理学、天文學などが日本人に学ばれ、やがて蘭学として本格的に発展していきます。書物、絵図などで当時の文化交流の姿を紹介します。



18年度 展示スケジュール

	蓬左文庫 展示室1	蓬左文庫 展示室2	徳川美術館 常設展示室	徳川美術館 企画展示室
4月	姫君のたしなみ ~ 4月9日	近代短歌 ~ 4月9日		雛まつり ~ 4月9日
5月	春季特別展 徳川義親と文化遺産 4月12日 ~ 5月28日			春季特別展 尾張徳川家の収納術 4月15日 ~ 5月28日
6月				
7月	名古屋城下町散歩 5月31日 ~ 7月23日	なごやのまつり 5月31日 ~ 7月23日		尾張徳川家 殿様の愛した名刀 6月3日 ~ 7月17日
8月			大名の生活と文化	天下人たちの時代 —信長・秀吉・家康— 7月22日 ~ 9月3日
9月	江戸の自然観察 7月26日 ~ 9月24日	国絵図と城絵図 7月26日 ~ 9月24日		幕末の残像 尾張の殿様が撮った写真 9月9日 ~ 10月1日
10月	秋季特別展 絵で楽しむ日本むかし話 —お伽草子と絵本の世界— 9月27日 ~ 11月5日			秋季特別展 茶の湯の名宝 —大名家の格式と伝統— 10月7日 ~ 11月5日
11月		異国へのまなざし 11月8日 ~ 12月10日	みる・まなぶ・たのしむ 幕末・明治の浮世絵 11月11日 ~ 12月10日	國 寶 源 氏 物 語 絵 卷 柏 木 宿 木 公 開
12月	12月11日 ~ 25日 12月26日 ~ 28日 12月29日 ~ 1月3日	特別整理休館 エントランス 閲覧室の開室 年末年始休館	12月11日 ~ 1月3日 年末年始休館	
19年 1月	東洋の印刷と版本 1月4日 ~ 2月18日	江戸のコミック —絵草紙の世界— 1月4日 ~ 2月18日	名物裂 —渡来織物の美— 1月4日 ~ 1月28日	
2月			大名の生活と文化	
3月	こころの旅 —名所と詩歌— 2月21日 ~ 4月8日	南蛮・紅毛の学問 2月21日 ~ 4月8日	特別展 尾張徳川家の雛まつり 2月3日 ~ 4月8日	2月 24日 茶 杓 公 開 3月 3日 4日

■休館日 毎週月曜日(祝日の場合は直後の平日)
ただし、本年5月1日(月)は、開館いたします。

■特別整理休館日 12月11日(月)~25日(月)
■年末年始休館日 12月29日(金)から1月3日(水)
12月26日(火)~28日(木) 閲覧室は開室いたします。



敷き詰められたレールの上を移動中の旧書庫

表紙は、現在、蓬左文庫の玄関ホールとなっている旧書庫の改築工事中の様子です。玄関ホールとして利用するため、曳き屋工法によって西向きから北向きに九十度回転させて建物ごと移動しました。写真には、移動を前に、本体を土台から切り離し、土台と本体の間にジャッキが差し込まれた様子が写っています。

旧書庫が、この写真の位置に建てられたのは昭和十年（一九三五）で、明治三十三年に完成した尾張徳川家名古屋大曾根邸内の北西にあった二棟の蔵（現在の蘇山

荘の北側付近）を移転改築したものでした。移築に際して、二棟を一棟に合体し、外壁は土蔵造りからコンクリート造りに改変されました。大曾根邸の大半が昭和二十年の空襲で焼失しており、徳川園の西門・脇長屋、徳川美術館内の茶室と並んで、明治期の残された数少ない建物のひとつです。

この建物の特徴は、伝統的な土蔵作りの軸組にキングポストトラスと呼ばれる英式の小屋組（三角形に組んだ柱で屋根を支える工法）をもつ珍しい和洋折衷の建築様式にあります。また、木造の小屋組を鉄筋コンクリートで覆う工法によって建物を強化して再利用した初期の事例として建築技術史の観点からも注目される建物です。

蓬左文庫が名古屋市へ移管された昭和二十五年から、昭和五十八年まで蓬左文庫書庫として使用され、その後も新書庫に入りきらない未整理資料を収納するなどこのたびの改築直前まで書庫としての機能をはたしていました。

改築前の調査では、予想以上の鉄筋が使用されているなど強度については太鼓判を押されています。

蓬左文庫

名古屋市蓬左文庫 〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地 TEL(052)935-2173 FAX(052)935-2174
ホームページ <http://housa.city.nagoya.jp/>

交通案内

■公共交通機関をご利用の場合

●名古屋駅より

【市バス】名古屋駅バスターミナル（テルミナ2F）グリーンホーム7番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

【名鉄バス】名鉄バスセンター（メルサ3F）4番のりば基幹バス「引山」方面行「徳川園新出来」下車徒歩3分

【JR】JR中央本線、「大曾根」下車南出口より徒歩10分

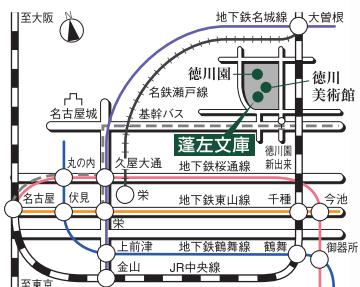
【地下鉄】東山線「藤が丘」方面行、「栄」で名城線「右回り」に乗り換え「大曾根」下車3番出口より徒歩15分 桜通線「野並」方面行、「車道」下車①番出口より徒歩15分

●栄より

【市バス】栄バスターミナル（オアシス21）3番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

■お車をご利用の場合

蓬左文庫専用駐車場はありません。徳川園駐車場（有料 30分 120円）をご利用下さい。



ご利用案内

■休館日／月曜日（祝日のときは直後の平日） 12月中旬～1月3日 ※催事により変更することがあります。

■展示室／有料 一般:1200円 高校生:700円 小中生:500円（蓬左文庫・徳川美術館 共通観覧）

【開室時間】午前10時～午後5時（入室は午後4時30分まで）

■閲覧室／無料・館外貸し出しあいません。

【閉架図書】午前9時30分～午前12時 午後1時～午後5時 【開架図書】午前9時30分～午後5時

【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。電話・郵便による申込みも可。